

私の「告白」

文&写真 学生記者 森田晴香(文学部4年)

「走るの好きだった。でもサークルは嫌いだった」

中大に入学したころ、私は陸上競技のサークルに入ると決めていた。同じクラスの学生が、偶然にも同じサークルに入るとのことで、陸上競技場まで連れて行ってもらった。

競技場で走る先輩たちの姿を見たとき、高校のころ、本気で陸上に取り組んでいたことを思い出し、目頭が熱くなった。

「私もまた、本気で陸上したい……!」

心から思った。

初練習の日は今でもよく覚えている。大勢の先輩が話しかけてくれた。私は恥ずかしくて、まともな返答ができていなかったと思う。優しい先輩の指導で、その日はジョギングをした。

徐々に競技場内での練習メニューにも入っていき、高校のころの感覚も戻ってきた。試合は個人種目だけでなく、駅伝も年に1回あった。

練習を積んだら大会に臨む。それが終わるとまた、ひたすら練習して大会へ。この繰り返しだった。

高校のころと何ら変わらないリズム。なのに、それなのに、サークルが全然楽しくなかった。

行くことが義務化されていると思うようになった。たくさんあるサークルの中から、自ら選び、自らの意思で行っているはずなのに。何かが足りない。しかし、私にはその何かがわからなかった。

私は、人生最大級に、戸惑っていた。

そうこうしているうちに、あっという間に2年が経ち、3年生になった。大学生活の折り返し地点にさしかかったとき、サークルに新しい学生が入ってきた。

「1年生?」と尋ねると、

「3年生です」と関西のイントネーションで返ってきた。

「じゃあ、同級生だ! 名前は?」

「なつみ!」

「じゃあ、なつみって呼ぶね! 私は、はるか」

「はるか、か! はるって呼ぶナ」



「え、なんか呼び方、可愛い。私も呼び方変えようかな…。いいか、なつみで」

「なんでやねん!!」

初めからこんな調子だった。その日からサークルの一員となったなつみは、すぐに周りと同じ打ち解けた。

同級生だけでなく先輩、後輩にも自分から話しかけ、相手を笑わせた。

実は、なつみは陸上部に入ったことがなかった。陸上は初経験だった。サークル内にはもちろん陸上初心者は何人もいた。彼女らは練習メニューには入らず、競技場の周りを自分のペースでジョギングしていた。

なつみは、「挑戦」し続けていた。走るペース、フォーム、スピード。わからないことは周りに聞くことを徹底していた。聞くだけで終わらず、実践し、トライ&エラーを繰り返した。

そんな姿を何度も見て、なつみを尊敬した。とても魅力的だった。なつみから、こう言われたことがある。

「はるは、もっと自分に自信持ちいや。はるは、周りをひきつける力があるよ」

心から驚いた。自分では思いもつかなかった。



自分の良さ。それは、わかっているようで、わかってあげられていなかったのかもしれない。なつみはそれを気付かせてくれた。

田舎から東京に出てきて、不安なこと、泣きそうなこと、実際に枕を濡らしたことが幾度もあった。そんなときは、いつでも友だちに頼ってきた。

失恋したとき、陸上のタイムが上がらないとき、就職活動のとき。なつみと出会ってから、なつみには必ず相談をした。相談すると必ず前向きな言葉をもらえて、また一步前に踏み出すことができた。

なつみも私にたくさん相談してくれた。いいアドバイスができたかわからないが、精いっぱい力になろうと励んだ。

なつみには「はるに話すとホントにいい答えもらえるワ」とよく言われた。まさにそれは、私もなつみに対して思っていたことだ。なつみに褒められると、本当に自信が持てた。

自分の学生生活に関して書くはずが、友だちの紹介文のようになってしまった。だが、後悔はしていない。この友だちなくしては、私の学生生活は語れない。

高校のころは楽しかったのに、大学では何か物足りない。それを私は周りのせいにしていた。

しかし、ある友だちと出会って、見え方がガラッと変わった。同じように見える世界でも自分が変われば、感じ方は180度変わってくる。大事なことをその友だちが教えてくれた。

大学にこれから入るといふときに、何を頑張ればいいのかわからない高校生。今の大学生活に満足していない在學生。そんな人たちに、大学4年間を終える私からのアドバイスはこれである。

「自分の価値を上げてくれるのは、友だち、そして自分である」